

防災歳時記 (53)

—「せき止め湖」を考える—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清治

せき止め湖が現れた

2008年は天変地異が続いた。5月2～4日にはサイクロン「ナルギス」がミャンマーを襲い、暴風雨・高波で死者・行方不明者13万人以上を出した。救援が進まず世界がいらだつなかで5月12日、阪神大震災の約30倍のエネルギーを持つ中国・四川大地震が発生した。

四川省を中心に多くの建物が倒壊し、8万人以上の生命が失われた。古い建物が崩れ、崩れた中に学校の多いのが痛ましかった。山崩れが川をせき止めてできた湖が同省だけで30以上も生まれ、決壊を防ぐための排水路を造る作業が進められた。

さらに6月14日には「岩手・宮城内陸地震」が発生し、死者13人、行方不明者10人、重軽傷者450人に達した。山間部を直撃したので、秋田・山形両県を含め230ヵ所以上で山崩れが発生した。せき止め湖が15ヵ所で現れ、宮城県栗原市の湯ノ倉温泉では水位が上昇して水没した。

せき止め湖、土砂ダム、震災ダム、地震湖、天然ダム、河道閉塞などいろいろの用語が乱れ飛んだが、湖やダムがほどなく決壊

して下流に大被害を起す怖さはみな同じだ。解説書に次のようであった。

堰止め湖 (dammed lake)

谷筋の途中が火山爆発、山崩れ、時には氷河作用のモレーン(堆積)などによってせき止められて水がたたえられた湖。堰塞湖。富士五湖や中禅寺湖、磐梯山の爆発によって形成された桧原湖などが好例である(金崎肇、1983 地理用語の基礎知識。古今書院)。

新湖(せき止め湖)が決壊した

明治22(1889)年8月18～21日の奈良県十津川郷の山崩れについては、すでに本誌1995年夏号「防災歳時記(1)」で述べた。

8月19日午前、台風(中心気圧970hPa)が高知県に上陸し、香川・岡山・鳥取県を通り20日午前6時には日本海に抜けた。

十津川村一帯では、台風上陸前の18日から雨勢強まり、19日は猛烈な雨となった。田辺の日雨量は18日に368、19日に902mm。

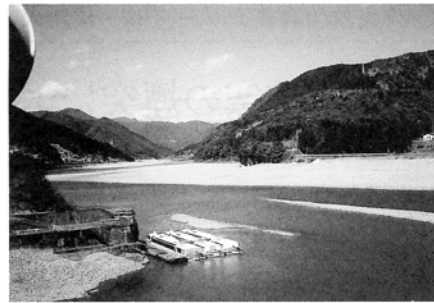
19日の1時間雨量は田辺で170、十津川村で120mmと日本一の大豪雨だった。

明治初め、オランダから招かれてきた治水技師デ・レーゲは「この豪雨は台風に伴った暖湿風が高さ4千尺の釈迦ヶ岳(標高1,800m)に遮られて直行突進することができず、縦横顛狂噴瀉して降ったもので、古今未だこのような豪雨を経験したことはない。近年香港で豪雨があり、学者は破雲雨の名で呼ぶが今回の豪雨はその最大のものと言え」と述べた。

19日夜は十津川村では雷電を伴う雨が激しく、山河震動し人々は門戸を閉鎖し、恐れおののき、ただ神仏に生命の加護を祈るのみ。激しい雷雨に避難の機会を失した。

20日早朝、雨は止んだが、山は20日午前中にかけて一斉に崩壊を始めた。

崩壊した土砂は、家屋や住民を埋め、さらに天ノ川や十津川などに流れ込み、川を閉塞し、大海のような新湖が53カ所も出現した。当時の水災誌という新湖とは、せき止め



熊野川(別名、新宮川)

湖や土砂ダムのこと。新湖へ土砂が突入し、これによる大波が、対岸に押し寄せ、人家を飲み込んだ。

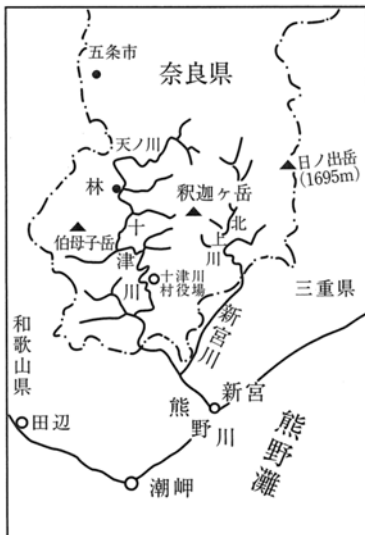
せき止められた新湖はたちまち水位が上昇し、盛り上がった濁水は逆流して上流へ上流へと遡上した。上流の木々を押し倒し、家々を洗い流した。“山へ登れ、早う登れ”と叫びながら、逆巻く渦に引き込まれた人もいた。逃げ遅れた人の叫び声や悲鳴が聞こえたが、助けるすべはなかった。

21日にかけて、多くの新湖は次々と轟音をたてて決壊し、土石流となって山を押し流し、被害を大きくした。

被害は3段階で起きた。まず、豪雨・洪水による第1次災害。次に山地崩壊(土石流、山津波)による第2次災害、続いて新湖の発生と決壊による第3次災害だ。大規模崩壊地は1,147カ所に及び、多くの新湖には固有の名前がつけられた。十津川本流をせき止めた林新湖は周囲26kmに及ぶ最大規模で、林集落では22人が溺死した。

奈良県吉野郡の被害は、死者249人、流失家屋365戸、全壊家屋200戸に及んだ。

(蒲田文雄ら：十津川水害と北海道移住、2006、古今書院)



十津川流域の略図